

藤香会だより



総会が開催されました



山崎 拓 会長

新型コロナウイルスの感染予防のため外出自粛によって1か月遅れで総会が6月21日に開催されました。山崎会長は挨拶の中で、「3月19日に一般社



小幡修様 講師の講話時の総会

田銀行より役員を招いたが、この時の筆頭株主は黒田家13代当主長成(ながしげ)公であった。その後大正12年には安田銀行との合併を進める黒田決議書が出ましたが、採択はされませんでした。

団法人が認可され、新しい形を持った会としてスタートした。コロナの影響で法要の取り止め等があつて会の行事にも支障が出てきたが、郷土の歴史を掘り下げ、文化の振興に力を尽くしたい。」と述べられました。

議案は、令和元年度の事業・決算報告と藤香会の行動基本方針および令和2年度の事業計画・予算・役員改選に伴う審議が行われ、全議案とも執行部提案通り可決されました。

終了後の講話は、福岡銀行顧問・小幡修さんの「福岡銀行の歴史から見た黒田家とのかかわり」と題しての講演がありました。

概要は「福岡銀行の起源は国立十七銀行で、明治10年に認可され明治30年には民間銀行として時の大蔵大臣松方正義伯署名の指令書が発行された。明治37年の財政危機で安田銀行(現みずほ銀行)の支援を受けて安



総会で審議する会員たち

第29号
令和2年7月1日発行
発行者
一般社団法人 藤香会
事務局
092-724-0007
発行責任者
毛屋 嘉明

役員は次の通りです。新しく吉田征則さんが理事に選出されました。

1. 主な決定事項

(1) 新役員

- 名誉顧問 黒田長高
- 顧問 山崎 拓
- 副会長 空席
- 事務局長 毛屋嘉明
- 事務局総務 田島満行(局長) 松尾等
- 研修 西田経敏 栗山順子
- 広報 田中崇和 大島泰治
- 会計 天本孝久 森 純子
- 原俊樹 篠原カズエ
- 高倉照矢 徳永良子

(2) 年間行事

今年度は主な行事として次のことを予定しています。

法 要

- 8月4日長政公法要(コロナにより中止)
- 2月12日忠之公法要(東長寺)
- 3月20日如水公法要(崇福寺)
- 神社大祭

- 光雲神社、宮崎宮、宗像大社、紅葉八幡宮、鳥飼八幡宮、住吉神社、警固神社、香椎宮、太宰府天満宮
- 文化活動
- 6月21日 総会終了後講話
- 9月25日 歴史勉強会(博物館)
- 10月末 史跡巡り・福岡の黒田ゆかりの地
- 2月12日 忠之公法要後講話

藤香会を支えてくれた人々

藤香会副会長 毛屋嘉明

藤香会は本年度総会で述べましたとおり「一般社団法人藤香会」となりました。「今回の法人化で何が変わったか」とよく聞かれますが、

今までの任意団体の時と大きくは変わらないという事です。定款にしても従来の会則のほうがより詳しいくらいです。今までの目的、会員数、行事、会議体、会計など全く問題なく、かえって設立時の役員数が多いくらいでした。メリットを一言でいうと「法人化により社会の信用度が増し今後の活動がやり易くなった。」という事です。またそれにより「会員の方の責任と義務が重くなった」と自覚して行動していただきたいと思います。

また今年度は藤香会設立130年になります。この間たくさん先輩諸氏がこの会を支え、引き継いでこられました。我々も次の人にバトン

を引き継ぐために努力を続けてまいります。これを機会にこの藤香会をこれまで支えてくれた方々について、感謝の意を込めて書き留めておきたいと思っております。藤香会の130年の歴史については別途広報から「藤香会130年沿革史」が刊行されますが、今回は私の知っている人を中心に功績や人柄などを述べてみたいと思います。今回は故人または理事を退任された方を中心としており、現理事として活躍されている方々は次の機会とします。

●故 中島敏行前副会長

昭和47年に入会され、山内勝也元副会長(鳥飼八幡宮、秦紀子理事の祖父)の後を受けて、昭和61年から平成23年までの27年間、副会長を務められました。その間、玄海沖地震による墓所の崩壊、15代長久公逝去、墓地の福岡市への移管、120周年記念碑建立、如水公顕彰イベントなど数多くの難題を処理されました。平成18年にはこの「藤香会だより」を創刊され、また、現在の事務局組織や年間行事の基本を整備されました。それによりこの藤香会活動も順調に進められております。一番この藤香会に貢献されておりました。平成24年より顧問に就任していただきましたが平成27年12月19日88歳で永眠されました。

●故 諸岡京子元事務局長

平成21年に事務局長にされましたが、平成24年4月に急逝されました。長い間事務局として会務の処理、文書類の作成・発送など家族ぐるみで作業し、会務を支えてくださいました。急逝だったので、その後を事務局だった私が引き受けましたが、何もわからず数年苦労しました。現会計の秦紀子理事のご母堂です。

●故 高倉清子元理事

黒田家の福岡の定宿であり、懇親会でもよく使っているタカクラホテルの元社長です。平成20年姫路で行われた、「黒田サミットお城まつり」にも元気で参加され、「黒田官兵

衛を大河ドラマへ」と大いに盛り上がりまし
た。現理事の高倉照矢さんはそのご子息です。

●故 平山芳子元理事

生家は黒田家と関連の深い紅葉八幡宮で、
長い間理事をされ、諸岡元事務局長と二人で
藤香会を長く支えてくれました。今年3月に
亡くなられました。

●鈴木讓二元事務局長

昭和54年入会され、親子2代で貢献されま
した。特に昭和62年からの墓地清掃の発端を
作られました。平成17年坂牧元事務局長のあ
とを受けて、主に史跡めぐりの企画や実施に
長年尽力されました。一時期顧問をしてい
だきました。

●木下正元理事・監事

大正14年生まれで今年95歳。「私の健康法」
を実践されており、最近はずの免許も返納さ
れ、野菜づくりもやめ、奥様と二人自宅で元
氣に過ごされています。

●村松伸哉元理事

広報担当理事として、永年会務に貢献され
ました。特に創立120周年記念碑建立・除
幕式、如水公411回法要とその後の顕彰イ
ベントは中心になって推進されました。平成
28年より体調を崩され、今は理事を退任され
ています。

●山崎美生子元理事

平成20年より12年間会長を努めておられる
山崎会長の令夫人です。会長が忙しく行事に
参加できない時によく来ていただきました。
最近はずを悪くされて理事を退任されまし
たが、賛助会員募集の際も会長の影の力とし
ていろいろ助けていただきました。

●平田善積元理事

平成18年の藤香会だより創刊より広報とし
て中島前副会長を助け、その発行に絶大な貢
献をされました。文章内容の語句の一つ一つ

に心を配われ、その編集には定評がありまし
た。

如水公ご法要



如水公墓参

新型コロナウイルス・ウイル
ス感染予防のため、恒
例の墓所清掃とご法要
を崇福寺からの要請も
あつて取りやめました。
そこで理事有志12名
による墓参のみ執り行
いました。墓所は福岡
市の草刈りも済んでい
て、1本の桜が花を付
けて迎えてくれました。

箱寫八郎会員に福岡市文学賞

前号で掲載した箱寫会員の歴史小説「筑前ち
んちく屏ものがたり」が2019年度福岡市文
学賞に選ばれました。この賞には歴史小説家の
白石一郎さん、推理作家の夏樹静子さんらが受
賞者として名を連ねています。福岡市発行の
「二〇一九年度 福岡市文学賞」という小冊子
には、同会員の小説「マコベエのいる風景」と
「黒髪山」が掲載されています。

ちよっとうんちく

今回は福岡藩の回船が漂流してポ
ルネオに漂着し、9年後に奇跡的に
ひとりの水夫が帰国したことを書き
ます。

九州大学に所蔵されている「筑前
唐泊孫七物語」に書かれていること
ですが、この漂流譚には類書が多く、中
でも亀井南冥の高弟であり甘菜館の祭酒(筆
頭教授)であった青木定遠興勝が、ひとり
帰国した水夫孫七から聞き取った「南海紀聞」
が詳細で学術的ある。

青木は藩最初の洋学者としても名高く、
この聞き取りにも世界地図を前にして質問

会員クリック②



本会理事 吉田 征則

【吉田久大夫利安】

元和2年(1616)重成の四男とし
て生まれた利安は寛永6年(1629)
14歳にて忠之公に召し出され1000石
を賜うになった。「栗山大膳事件」で幕
府の詮議にあたり、十七歳でお供に加わ
り江戸においての精勤を認められ忠之公
から褒美の脇差と感状を受けた。同15年
(1698)二十三歳で「島原の乱」に
出陣し度々戦功をあげ同17年(1640)

には2000石を賜うことになり、同
年妻も得た。妻は竹中重次(竹中半兵
衛の孫)の女で翌年嫡男も生まれ、こ
こまでは順調な人生であったが、同19
年(1642年)忠之公の勘気を被り追
放処分を受け浪人となり妻子共々各地
漂白し奈良、大阪で子を生し、慶安元
年(1648年)松平讃岐守の招きに応
じ小早川帯刀と称し約10年間仕えること
となった。その後光之公の代になり、萬
治元年(1658)光之公より召し返さ
れ再び吉田久大夫と改め小姓頭となり
2000石を賜る。寛文5年(1665)
には執権職を命じられ2500石を賜う
こととなり、ここに小吉田の完全復活が
果たされました。また利安は「大略記」
「延宝八年記」を著して貴重な歴史資料
を残しております。

をし、調査を行っている。また「南海紀聞」
には現地 の物産・風俗・訳言・俗語などが記
されており、他の類書を雑書と言いつつ、その説
杜撰はなはだ多し」と言いきつっている。

筑前五ヶ浦のひとつ唐泊(現福岡市西区唐泊)
の、宝暦12年(1762)に新造された伊勢
丸(1600石積み)が明和元年(1764)
に津軽の材木を江戸に運ぶ途中風のため、奥
州と常州の境の塩家の岬より漂流を始める。
70日余り流されて陸地に到着する。「孫七物語」
ではここを後にポルネオと聞いたと書かれて
いるが、「南海紀聞」ではマキンタロラ(ダバオ・
ミンタナオ島)となっている。

その人間に奴隷としてそふろく(スール
諸島)の海賊に少人数に分けられて売られる。
途中、病死するものも多くいた様子が書かれ、
現地では水葬にするため、孫七たちは頼んで
陸に穴を掘り埋葬したとある。
その後ポルネオの華僑に30文で売られ、そ

★新規入会員紹介

平成31年/令和元年

- 1. 一般会員 吉田道央・中村泰三・丸茂克浩
- 2. 協賛会員 52社